

## 直江俊雄

『20世紀前半の英国における  
美術教育改革の研究』

マリオン・リチャードソンの理論と実践』  
(建帛社)



20世紀前半の英国における初等・中等教育の美術学習は、大きな変革期にありました。それは、すべての人が表現の主体者として固有の価値を生み出しうる存在であるとする理想を共有した、学習者中心の教育を志向するものであったといえます。このような時期に、マリオン・リチャードソン(1892 - 1946)は、地方の中等学校での指導を通して子どもたちの内面的イメージを重視した独自の教育方法を発展させ、のちにロンドン市美術視学官として、改革の中心的役割を果たしました。その成果は美術批評家ロジャー・フライやハーバート・リード、美術史家ケネス・クラークらの熱心な支持を受けて注目を集めました。具体的な方法や理論の形成過程には不明の点が多く残されていました。

本書は、近年新たに公開された当時の未刊行資料の現地調査にもとづき、リチャードソンの美術教育論と実践の解明を通して美術教育史研究に新たな視点を提示するとともに、今日までその影響を残す20世紀前半の美術教育改革の意味を問い直そうとしたものです。特に、子どもたちと現代美術の現場との相互交流の結節点となる教育者の中で独自の理論と方法が形成された過程を示すこと、これまで看過されていた「マインド・ピクチャー」と呼ばれる独特の方法について、約500点に上る作品群のデータベース化をもとに、その特質と役割を明らかにすること、学習者中心の教育への転換の質が再び問われる現代への導入の示唆などは、本書における主要な課題となりました。

本書は、2000年3月に学位授与を受けた同標題の博士論文をもとに、2002年2月、日本学術振興会科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の助成によって出版したものです。駆け出しの研究者の初期の通過点です。今後、これを乗り越える仕事を展開できるよう努力してまいります。

研究室ウェブサイトでも紹介しています。

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/naoe/>

(なおえ・としお 芸術学系講師)